# 石を見つけよう

## 主の眠る場所

古墳とはお墓なのですから、その主が葬られているはずです。では、いったいどこに葬られているのでしょう。

主の眠る場所は、入口が埋められたり、ふさがれたりしています。たとえ墓穴が見つかったとしても、多くの古墳に使われている木製の棺は、永い年月のあいだに朽ち果ててしまい、見ることができません。いま見ることができるのは、石で造られた棺や、それを入れる石積みの部屋だけです。主の眠る場所を見つけるコツは、石を見つけることなのです。

古墳時代は三〇〇年以上も続いたため、時期によって変化が見られます。主を入れる棺と棺を入れる部屋（室）も時期や、あるいは身分によって違いが見られます。

島根では珍しい長持形石棺。古墳の上に大きな石があり、文様が刻まれている。
（松江市古曽志町・丹花庵古墳）

## タテ穴の墓とヨコ穴の墓

### 古墳時代のはじめから造られたタテ穴の墓

墳丘の上にタテ穴を掘り、棺を納めるという埋葬法は、古墳時代より以前の弥生時代にすでに見られます。また古墳時代の初めごろは棺を埋めたあと、その上でお祭りを行った形跡が見られ、これも弥生時代と共通しています。

石で造られた棺にはさまざまなものがありますが、いちばん多いのが板状に割った石で造られた、箱形の石棺です。凝灰岩などのやわらかい石を丁寧に加工して造られた舟形石棺や、長持形石棺は非常にまれです。また木棺を納める石積みの部屋である竪穴式石室は、初期の大きな古墳によく見られますが、ほとんどの古墳は棺を直接墓穴に入れています。

安養寺1号墳をモデルに復元された「タテ穴の墓」
（仁摩町サンドミュージアム内）

### 古墳時代終りごろに造られたヨコ穴の墓

古墳時代も終りに近づく六世紀ごろ、古墳に一大変化が訪れます。石を積み上げて造る「横穴式石室」と、山の斜面を直接掘り込んで造る「横穴墓」の登場がそれです。ヨコ穴の墓には棺や遺体を入れる部屋や、外から部屋へ通じるトンネルを備えています。この変化はたんに入れ物の形が変わったというだけでなく、死後の世界に対する人びとの考え方が大きく変わったことを意味しています。

両者の関係は一五ページで紹介しますが、県内の古墳でよく知られるものは、この二つが圧倒的な割合を占めています。理由としては、横穴墓は非常に数が多く、横穴式石室は墳丘の土が流れてもそのまま残ることが多いこと、なによりもその石の大きさが目立ち、発見しやすい点にあるでしょう。

安養寺2号墳をモデルに復元された「ヨコ穴の墓」
（仁摩町サンドミュージアム内）



# 古墳の主　探検マニュアル

それでは、いよいよ古墳の中を調べてみましょう。主の入れられた棺や、部屋が見つかるかもしれません。
コツは石を見つけることです。さあ、古墳探検のハイライトへ出発!

## 古墳の上に登って石を探す

### 石が散乱する

能木原古墳群(西郷町下西)

**破壊された石棺・石室**
小さな板石が多い場合、竪穴式石室の可能性がある。

### 石積み、並んだ石がある

幅50cm前後の板石が立て並べてある

方結(かたえ)
神社裏古墳
(美保関町片江)

**箱式石棺**

東光台古墳
(松江市東津田町から風土記の丘に移築)

**板状に割った石を組んで造った棺。ふた石がはずれていることが多い。県内各地に見られます。**

幅1m以上の石積みがある

やつおもて古墳群(旭町重富)

**横穴式石室**

地蔵山古墳(出雲市上塩冶町)

**次ページで内部を説明します。**

### 2m以上の大きな石がある

細かな加工がなされている

竹矢岩舟古墳(松江市竹矢町)

**舟形石棺**

徳連場(とくれんば)古墳(玉湯町玉造)

本体もふたもそれぞれ一つの石を彫刻して造られ、舟の形に似ている。
側面に「縄掛突起（なわかけとっき）」と言うコブが付き、本体の内側に枕を造ったものもある。
宍道湖・中海周辺に多い。

偏平な石である

雲津(くもづ)古墳(美保関町雲津)

### 石が見つからない

古墳の裾、斜面を歩く

客人社(まろうどしゃ)古墳(美保関町美保関)

大きな石が散乱する

山根垣古墳(平田市西郷町)

石積みのトンネルがある

石がない

**墳丘が高い（2m以上）**

**横穴式石室かもしれない**

**墳丘が低い（1m以下）**

**棺が埋まっていて、見ることができない**
木製の棺であることが多い。